

# テヘランだより



イラン地質調査所のマーク 背景はダマバンド山 創立年はイラン歴の1338年が1959年に当る

今 私はイラン国の首都 テヘランの仮寓の一室でこの筆をとっています。北側の窓から イランの最高峰 日本人の間でイラン富士と親しまれているダマバンド山(5780m)から西へ連なるエルブルツ山脈が白雪にかがやいているのが眺められます。今年はここ テヘランも春がおそく ようやく3週間ほど前から日ざしが強くなってきたばかりです。積雪が比較的多かった冬からようやく抜出した後 間もなくやってくる灼熱の夏までのわずかな期間がテヘランの一番美しい春の季節です。

皇帝の住まいのあるカッハの通りの新緑の並木や土壁のへい越しにみられる藤の花などを通勤の往復に見ながら この季節がもう少し続いたらと思うのは私一人ではないでしょう。早いもので テヘランの春を過ごすのもこれで3回目になりました。石の上にも3年とやら 沙漠の国の生活にも多少は馴れてきたようですから 私がここに着任してからの様子を 断片的にお知らせしてみることにしました。

エルブルツ 峰の白雪深けれど  
ここ テヘランに春みたびきぬ

## 1 イラン地質調査所の創設

国際連合の技術援助(特別資金による)(Technical Assistance Operation of the United Nations (under the Special Fund) 略して UN・TAO)の一環としてイラン国に地質調査所(Geological Survey Institute)を新たに創設する事業が1961年から5 年計画で発足した。この事業の manager となってテヘランへ赴任した Dr. D. A. Andrews(1962年2月着任)から 兼子元所長の下へ私の派遣依頼があったのは 今からちょうど3年前の1962年5月でした。Dr. Andrewsは アメリカ合衆国地質調査所の Dr. W. Johnston の下で アジア地域の地質関係の仕事に長い間たずさわっていた人で、ビルマ 中国 韓国 インドネシアおよび日

## 平山 健

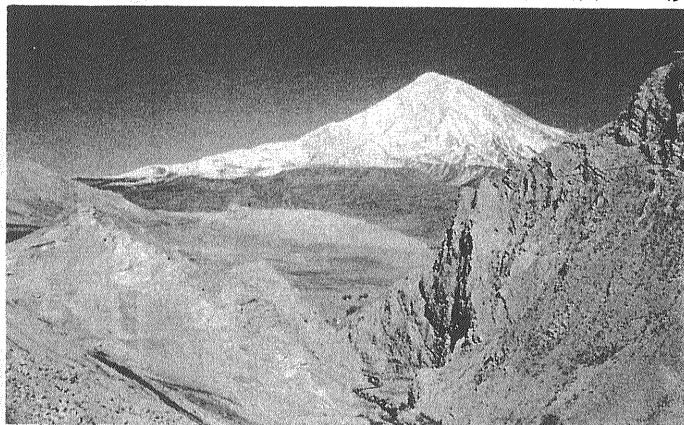
本などに滞在し 同地域の地質 鉱床および各国の民情によく通じた地質学者です。ECAFEの鉱産資源の開発部会にはその部会の発足以来 皆出席している由で また彼の言によれば 日本へは24回渡航しているとか 外国地質家の中では日本の地質家が一番なじみ深い人の一人です。彼は着任すると同時にイラン側で準備してあったイラン鉱工業省の一室で イラン地質調査所長に指名された Engineer N. Khadem (Engineerはイランでは国立大学の理工農科の学部を卒業したものに使われる称号で 日本の理工農学士に相当する)と共に まず国連側で諸外国から呼ぶ地質家を探し その第一歩として国立イラン石油会社(National Iranian Oil Company 略称NIOC)の地質家としてイラン在住10年以上で イランの地質に精通しているスイス人の Dr. J. Stöcklin を野外地質部門の責任者として招き さらにイランの地質調査に数回の経験を持つオーストリア地質調査所の Dr. A. W. Ruttner を呼んだのです。私が派遣されてテヘランに着任したのは1962年11月初めでしたが その当時は国連側としては上記の3名が イラン側としては所長の外 テヘラン大学工学部の鉱山地質学科を卒業した若い地質家が3名位と数名の職員・補助職員が 鉱工業省の3,4 室に雑居している状態でした。Dr. Andrewsに伴われて初めて出勤した日 自分の坐るいすもなく 雑然とした事務室の中に ペルシャ語しか通用しない人達と顔をあわせた時には これから一体何を どうすればよいかと途方に暮れたことでした。

地質調査所を創設する目的で派遣された

のだとは知っていても またすべての文化的機能におくれているイランであるとは思っても 地質の地の字すら感ぜられない一室に放り出されては 途方に暮れたのもまたやむを得なかったかも知れません。ここにお見せするイランの地質調査所のマークには創立の年が1959年となっており 官制上は59年に創立されたことになっているのですが 私が着任した当時 すでに2カ年がたっていたにもかかわらず 実際にはこのような状態だったのです。

現在 まがりなりにも一応地質調査所の名で呼べるような施設になって 多少の調査実績もでき 外国からの地質家も10名以上の数になり イランの地質家も20名をこえたのを見ると その頃のことは全く夢のような感じさえるのです。1963年から1964年にかけて カナダ スイス オーストリア ノルウェイ スウェーデン フランス アメリカ 日本(東大教養学部岩生周一教授を岩石 鉱物部門の主任として迎えた)などから岩石 鉱物 鉱床 古生物 地下水 化学分析 選鉱の専門家を招き イラン側としては外国へ留学して地質学に関する訓練を受けてきたものとか テヘラン大学卒業の若い地質家を採用して現在の人員に増加したわけです。一方ようやく手狭になった鉱工業省の一部から5階建てのアパートへ仮住居を移し 独立した調査所となったのは1964年の春でした。基礎的な研究 調査設備も 当初から急いで外国へ発注し1963年中頃からそれらが入荷しはじめたので 鉱工業省から調査用品を借用して調査に出ることもなくなったのです。現在テヘラン国際空港に近い場所に2階建ながら(総面積は溝の口の調査所と同じ程度)近代的設備を備える調査所を建築中で それが今年末か来年初めに完成すれば 諸研究設備とあいまって 人員も約50名に増加し 中近東では屈指の地質調査所になるでしょう。

経費について数字であらわすことは略しますが 国連の職員の人件費および研究設



① テヘラン市北西70kmにそびえるイラン最高峰のダマバンド山(5,780m)

備費は国連で イラン側の人件費 庁用備品費および調査費はイラン政府が支出することになっており 建築費は別途にイラン政府が支出しているのです。

現在行なっている事業は 外国からきている野外地質家の一人を主軸とする図幅調査 地域地質調査 鉱床開発のための地質調査などで どの組にも2名ほどのイランの地質家が同行して指導を受けつつ調査を進めています。ご承知のようにイランの主要な鉱産資源は石油ですが その調査はNIOC その他の石油会社で古くからよく行なわれていますから 地質調査所の事業として石油に関する調査は行なわず また現在では物理探査 地化学探査 試錐なども行なう計画を持っていないのです。

何と言っても地質調査事業のおかれているこの国のことから 上記の諸調査の中でも主眼になっているのは鉱床調査で 地域や図幅の調査も鉱床を胚胎していると思われる地域を主として取りあげているわけです。イランの地質家はこれまで調査の実施について基礎的な訓練を受けていないので すべての点で外国の地質家が主体となり イラン人たちは助手の役割りをしているのですが 1966年からは野外調査については国連が手を引くため 主体は彼ら自身に移るわけで 指導する方もそれを受ける方も真剣にならざるを得ません。

調査のとりまとめについても全くの初歩たとえば 地質図 地質断面図の書き方 科学的な報告書の書き方から英文の補正 製図法 製図の技術者の養成などからはじまったわけで 模様による地質図の作成から色刷りの地質図印刷技術の世話まで行なってきました。とくに後者についてはスイスの地理調査所から2名の専門家を招いて持参してもらった諸器械の使用法から指導を行なっているのです。

イランには国立機関として測図や地形図作成を専門に行なっている地図局 (Cartographic Center) が企画庁 (Planning

Bureau)の中にあるのですが 余り花々しい活動は行なっておらず たとえば三角基準点の設置も全国的には行なわれておらずしたがって詳細な地形図も全国をカバーしてはいないのです。不正確な25万分の1の地形図らしいものはありますが われわれの使用に耐えるのは米空軍がほぼ全世界について作成した Aeronautical Map (25万分の1)にすぎないので、米空軍によって作成された空中写真が ほぼイラン全土をカバーしていますから 実際の調査にはこの空中写真(縮尺約4万分の1)を使っています。鉱山調査など さらに詳細な地形図を必要とする場合にも現在は人員もなく 測量の技術家を伴って行く所までいっておらず さらに将来 調査所の測図課をどうするのかも未だ決定していません。空中写真は非常に明瞭に撮影されていますから 基準点が設置されていて 多少の器械が輸入されれば 空中写真の図化は比較的簡単に行なわれると思うのですが 残念なことに現在では不可能な状態で、

詳細な地形図がないためでしょうか テヘラン大学の卒業生でも地形図を読むこと 地形図に地質の状態を記入することなどの知識が非常に乏しいことは私の驚いたことの一つでした。着任当初 よい地形図が作成されていないことと 空中写真のよいもののあることを知って 日本でその写真を図化してもらうことを思い立ち まさか 三角基準点が設置されていないとは思いませんでしたから 日本のある商社へその取り次ぎを依頼してしまい あとで基準点の設置されてないことを知って 商社へ取り消しを頼みに行ったりして恥をかいたことを思い出します。これは地形図作成についての笑い話ですが ここでも後進国でよくある例にもれず 日本並みに事がはぶどと考えてとった行動が案に相違して進まず 自分だけの「からまわり」に終わってしまったと言うことが どの位あったでしょうか。ある外国人はいつも「インジャー・イラン」(ここはイランの意味でここでは自国並みに ことは運ばないと言う意味)と言って笑っています。テヘラ

ン大学の地質学科(1964年度まで理学部工学部の両方において毎年20~30名の卒業生を出していましたが 1965年度から理学部に統合されています。卒業生は出てもイランの現状では 少数の石油会社と鉱山局および地質調査所以外に専門分野の就職先はないのです)の卒業生でも 個人としてハンマー・プラントコンパスなどを持っているものはないとか 製図係の主任が私の所へコンパスを借りにくるような状態であったとか そのような事からの経験は全く数え切れず Dr. Andrews と「忍耐と奉仕」の標語を作って笑ったこともあったのです。

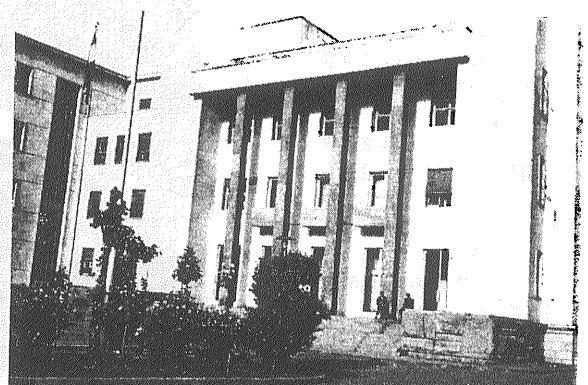
化学分析については鉱工業省の一部に以前から分析係があって 鉱石などの分析を行なっていたようですが 正確さや精度については疑問です。その中の人の一部を地質調査所にうつすため 現在米国地質調査所からきている専門家が指導していますから 新庁舎が完成のあかつきには明るい分析室ができて 技術的にも段々向上するでしょう。ただ分析用のガラス器具や薬品類はほとんど輸入品ですから その点はなかなかたいへんでしょう。

鉱工業省に仮住居していた当時から図書室の整備にも力を入れてきたのですが 元来 外国文献(単行本もまた定期の出版物も)はほとんど皆無だったため その整備はなかなか困難です。国連の予算も図書館購入費まではじゅうぶん手が届かず 諸雑誌の購入もなかなか思うままにならない状態ですから ましてバックナンバーの整備となると全く気が遠くなるように感じられます。同様に標本室の陳列標本についてもたいへんです。フランスからきている鉱物学者は10数年にわたって中近東の鉱物の研究を続けており 標本もなかなかみごとにものを集めています。新庁舎の標本室の予定カ所に立ったとき ここを満たすだけのよい標本を集めるのにはいったい何年かかるだろうか と話していました。

研究設備についてはどうしても必要な基本的なものからという建前で相談し 顕微



② テヘラン国連事務局 右上のマークは入口の上にある



③ イラン地質調査所が産声をあげた鉱工業省正面玄関

鏡とか 空中写真実体鏡 その他を発注し  
 順次拡張してきたのですが もろぶたや  
 薄片箱から戸棚 岩石整理ケースなどひとつ  
 つひとつつ法を考えて設計し 発注までこ  
 ぎつけるのはなかなかやっかひでした。  
 発注するにしても色々な問題が起きます。  
 たとえば岩石切断機一台を考えても アメ  
 リカ オランダ ドイツ スウェーデン  
 日本などからとりよせた型録をみていると  
 いったいどれが適当か迷うわけです。 日本  
 で使うなら問題なく日本製品を選ぶので  
 しょうが あとの故障 修理を考えると  
 価格などもさることながら やはりテヘ  
 ランに代理店があつて(ライツ フィリップ  
 ス シーメンスなどは代理店をおいている  
 のです) 比較的容易に修理の可能性のある  
 ヨーロッパのものとなつてしまい 日本製品  
 のイラン進出はやはりむずかしい と言  
 うような結論になってしまうのです。

上記のような状態の中にイラン地質調査  
 所を(少なくとも基礎的な部分だけでも)作  
 り上げて行こうとわれわれは約3年間の努  
 力を続けてきたわけですが 国連の5年計  
 画によるこの創設事業も来年末には一応  
 終了の予定です。 計画によれば第4年目の  
 今年(1965年)で野外調査の指導は一応打  
 切り 来年(1966年)は室内の研究設備の整備  
 と指導に集中して行く方針で 諸外国から  
 きている野外地質家は 今年中に順次に引  
 上げてしまい 来年は古生物 岩石 鉱物  
 鉱床 地下水 化学分析および選鉱などの  
 専門家だけが 設備の整備と研究指導の仕  
 事にあたることになるのです。 Project  
 Manager の Dr. Andrews と野外調査  
 の責任者である Dr. Stöcklin は最後まで  
 残るはずですが、このようにして来年末  
 には国連の手を離れたイラン地質調査所が  
 独立して創立されることにより その後の  
 事業はイラン人によつて進められて行く  
 わけです。 この場合 外国人の地質家を引  
 きつづき招いておくかどうかは 現状から

はもちろん何とも言えないこと  
 ですが 民族意識の強く起こりつつ  
 あるイランで それが行なわれる  
 可能性は多くないようです。

現に NIOC などでもイラン人  
 だけの地質部門に変えつつあるよ  
 うですから。 ともあれ私はイラン  
 人によるイラン地質調査所が近い  
 将来 中近東のすぐれた調査所  
 として活躍することを切望してい  
 るのです。

## 2 過去におけるイランの地質調査事業

話が前後しますが 以上のように  
 地質調査所の創設が企画される  
 以前にはイランの地質調査事業は  
 どのようにして行なわれていたかを簡単に  
 述べてみます。 鉱工業省の中に鉱山局が  
 あつて ここにはテヘラン大学や外国の大学  
 で地質学を学んだ地質家が 3, 4 名おり  
 日本の鉱山局と地方の通産局の鉱山行政部  
 門を合せたような仕事をしており イラン  
 の鉱業法による鉱区の設定 鉱業権の認可  
 などの業務を行なっています。 この地  
 質家は業務の遂行上必要な場合に鉱山の地  
 質調査を実施していたし また現在でも行  
 なっているようですが 主目的が行政的な  
 分野であるため 地質調査そのものを主眼  
 点に行なつてはいないようで まして学術  
 的な研究は全く行なわれていないのです。  
 地方の県庁所在地にも通産局のような官庁  
 が小規模には設立されていますが そこ  
 では地質とか鉱山行政に關しての業務はほと  
 んど行なつておらず わずかに鉱業権に關  
 する小問題とか鉱山の保安に關する業務を  
 取り扱っているにすぎないようです。

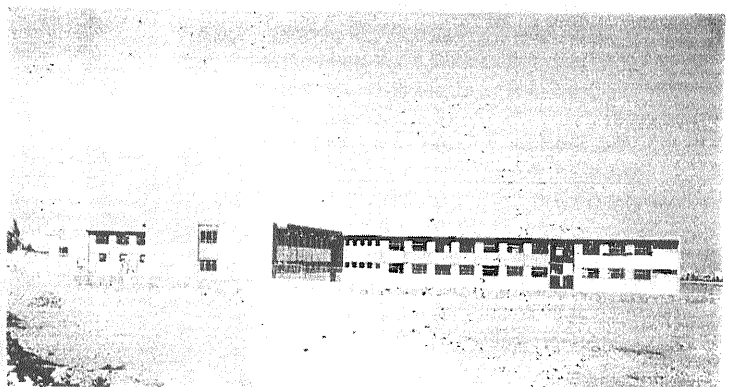
一方 大学の地質学部はどうかと言いま  
 すと テヘラン大学にはもともと工学部に  
 鉱山地質学科があり(前記のように1965年  
 から工学部所属を理学部に移し 理学部に  
 統合した) 数年前理学部にも地質学科が設  
 立されて数名の教官が授業を行なっている  
 し また実習 実験も行なつてはいるはずな  
 のです。 実際 教室をのぞくと研究設備



は非常によく整い たとえば顕微鏡などは  
 ライツ製のすばらしいものが30台以上も整  
 備されているし 標本室にはクラツツの岩石  
 鉱物の美しい標本が整っているの  
 です。 図書も 雑誌類はほとんど購入され  
 ていないようですが 単行本は一応揃えて  
 あります。 教授陣もイラン人以外に 仏  
 英 独などから招へいた人たちもおられる  
 のです。 にもかかわらずテヘラン大学  
 地質学科の卒業生の実力はいかにもひく  
 時には全く驚くような無力を發揮します。  
 この原因がどのへんにあるのかよくわかり  
 ませんが イランの大学生の勉強方法やそ  
 の態度を一般的に見ると 教科書を暗記す  
 ることを勉強と考えている風潮が強く 大  
 学の方針も教科書による講義を重視して実  
 習 実験を軽視している様子が見られます  
 から 上記のような結果を招いているのも  
 実地の研さんを積むことが少ないことに起  
 因していると思われるのです。 もっとも  
 イランでは鉱山といつても小教で 地質学  
 的にじゅうぶん調査され 資料の整つた所  
 はほとんど皆無ですから 学生にじゅうぶ  
 んな実習をさせる所もないわけです。 人  
 文科学の分野は知りませんが 自然科学の  
 分野に關する限り全般的にこういえるよ  
 うです。 これを裏証することががらは数回に  
 わたる調査旅行中の助手たちの言動や 顕



④ 現在地質調査所が仮  
 住居している建物



⑤ テヘラン国際空港近くに建築中のイラン地質調査所



⑥ 談笑のひとつとき 左からアンドリウス博士(アメリカ) ティール博士(オーストリア) ストックリン博士(スイス)

微鏡観察をやらせてみるの結果 数多く見ることができました。また数名の助手達に対して機会あるごとに 大学の先生の一 番大切な仕事は何かと聞いてみました が その答の全部が「授業」と「行政的な 管理の業務」をあげて「研究」について答 えた者はただ一人もなかったのです。テ ーラン大学でも地質に関する研究論文はご く少数の人々によって きわめて少数が発表 されたのみらしく 少なくとも現今までの 大学のあり方には一考を要する点が多く あると思われるのです。地質調査所の設 立も一つの契機となり 地質学に対しての 考え方も変り 地質学科のあり方も順次に 改善されて行くと思われまますから将来は 他国の大学のように成長して行くとは思 いまます。

NIOCおよび 2, 3 の石油会社の地質調 査事業は石油資源に関するかぎり非常に詳 細に行なわれており 成果も高く評価され ねばならないと思います。もちろん外国 の地質家たちが中心になって行なわれた調 査でありましようが 資料も多年にわたっ て集積され 化石 岩石に対して研究・収 集もあり 現在のところ地質調査所が介入 する余地は無いと思われまます。ただそれ らの資料はほとんど全部が未発表であり 参照することもなかなか困難であることは この国に限ったことではないにしても非常 に残念に思われるのです。NIOCの地質 家の業績は彼らの作ったイラン地質図(250 万分の1)にもあらわれています。多年 にわたる彼らの研究 調査の結果まとめら れたものですが この種のものとしては唯一 のすぐれた出版物です。

その編集にたずさわった Dr. Stöcklin にいわせれば 概念図であって誤りも多く また数多くの問題が残されているというこ とですが。

その他 現在まで外国の個人または団体 によって調査された例も数多く残っており 出版物もあります。個人としては J. W. Gregory, F. G. Clapp, A. Gansser, J.

V Harrison などの 名前がイランの地質調 査史上に残され また 鉱床調査に関しては この数年間に企画庁 で実施したアメリカ イギリス イタリア ドイツなどの調査団の 業績が大きく さらに また日本から種々な困 難を克服して調査にこ られた イラン鉱物資 源調査団や イラン亜 鉛鉱石買付促進技術指

導団などの業績も高く評価されなければな らないでしょう。

### 3 イラン地質調査所の将来性

書き落した点や誤解にもとづく誤報もあるかと思いますが 以上のような状態の中 にイラン地質調査所の創設が企図され ようやくその第一歩を発足したのです。前 記のように1967年からイラン地質調査所は 国連の手を離れて独自の力で進まねばなり ませんが イラン人によって主催される地 質調査所がどのような発展の過程をたど るか? それはわれわれ その創設を手伝っ たもの全部が深い関心と期待をもって見て いる所です。そう思ってみますと 私は ちょうど100年近く前 日本の調査所が外国 人の援助を受けて創立され われわれの 先輩によって引きつがれ そして今日の状 態まで発展した道を思わずにはいられませ ん。われわれの先輩に当る 当時の日本の 地質家が残された非常にすぐれた足跡を みると イラン人にそのような足跡を残 せるかどうか ある意味では疑問を持たざる を得ないのです。もちろんイラン地質 調査所の将来については明るい希望のある こともじゅうぶん考えられます。という のは イランは現在では多くの諸国に比べ て近代文化の普及 発展はおくれ 工業ら しい工業も起っておらず ほとんどすべて の商品は莫大な石油の輸出によってあがな われた輸入品であるけれども しかし広大 な面積を持ち その中 には未調査 未開発の 種々な鉱山資源の埋蔵 が予想されるのですからイランの調査所の行 手には国と民族の発展 のための基礎事業を行 なう明るい希望がある といえるでしょう。

しかしまた一方 かつ ては栄光に輝いたペル シヤ文化を持った国で あったにもかかわらず

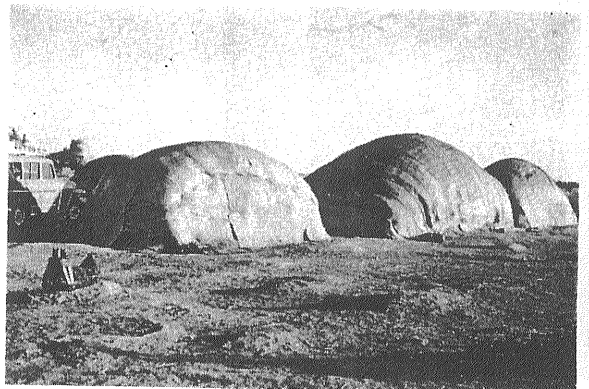
自然科学の発達が極度におくれ 熱砂の中 に取りのこされた民族である現状をみると

将来 どれほどの期待が持てるか 一抹 の不安を覚えざるを得ないというわけ です。近い将来イランの地質学会を背負っ て立たねばならない若い地質家の卵を抱き かかえて われわれ国連のものはただ地質 学に対して 生涯をかけて情熱と愛情を貫 きとおしてくれるように切望してきたので す。

### 4 テヘランにおける国連の状況

次にテヘランにおける国連の状況につい てごく簡単に述べてみます。国連職員とし て当地に派遣されるまで おはさしいこ とながら国連に関して全く知識を持たな かった私ですし 他の外国における活動状 況についてはいぜんとして知るどころがな いのですから ただテヘランでの状況を書 くのに止めます。

テヘランの国連は代表の D. A. Hopkin- son 氏以下約180名のメンバーで構成され ており 活動は事務局と次の10部門 (UN TAO, UNIC, UNICEF, ILO, FAO, UNESCO, WHO, ITU, WMO, IAEA) に分れて行なわれています。この中 代表 表の下で事務局を構成しているメンバーは 秘書や電話交換嬢まで加えて 約25名です から 各分野の専門家 約155名です。前記のように 地質調査所関係の仕事をして いるのは10名の地質家 2名の地質図作 成の技術家および2名の秘書となっています。国連である以上当然のことですが この180名のメンバーは世界中の国の人で 構成されているのです。たとえば 事務局を例にとれば 代表 D. A. Hopkinson 氏は米人 副代表は Mrs. Robinson で 米婦人(最近まで英人でした) その下の庶 務課長はイラン人 同係長はインド人 ス ウェーデン人とドイツ人 会計課長はギリ シヤ人というぐあいです。それらの人達 の下で働いている秘書の人たちもスイス人 アメリカ人 中国人 イラン人 アイルラ ンド人英国人 ニューージーランド人などが ぶくまれています。そのほかの10の分野



⑦ パルチスタン地方の住居キャパール(後方からみたもの)

で働く人達は世界中の国籍に渡っています

このように色々な国籍の人が集まって一つのオフィスを構成していることは 何と云っても国連のオフィスの特長でしょう。全体にわたって使われている言葉は英語ですが もちろん 個々の場合には本国語が使われており 外国人の間でも片言のペルシャ語がそこそこで話されています。国連の創立記念日などに開かれる代表主催のパーティは世界人種の展示会の観を呈するものもとてもなことで 話している言葉も全くまちまちです。代表を主班とする事務局ではもちろん全体を統括し 各々の部門の活動を実施する力となっているのですが 各部門はニューヨーク本部に直属しており 業務の面で二つの代表が各部門の主班となっているわけではありません。個人もニューヨーク本部に直属しているの 任命 辞任 異動などの人事 俸給の支給 帰国休暇 外国旅行などに関する事務手続きは全部ニューヨークの本部からの指令で行なわれています。

本部に統合されているので もちろん 便利な点もありますが 公的にもまた私的にも 全部ニューヨークの事務局本部宛に書類を提出し その許可をえて行動を起こさなければならないので非常に日数を要し 業務の遂行や個人の行動がおくれるうらみも多いのです。それを緩和するためにジュネーブやニューヨークなどの本部とテヘラン事務局との間には特別扱いの定期便がもうけられています。このようにだいたい事務がニューヨーク本部へ持ちこまれているわけですが 180名の職員についてのイラン側に関係のある事務はここでこなしているのですから 仕事の量は決して少ないとはいえません。着任 退任するもののイラン政府に対する事務手続き 持参品の関税手続き 個人の自動車に関する諸手続き 家屋の借用についての手続き (たとえば着任した専門家がアパートの室を借りるときに普通の場合は庶務課長が立会人となって家主との間に契約書を作成してくれる) などから俸給の支給 イラン国内における各種証明書の発行 郵便物の処

置 配布までよく小人数でこなしています。たとえば会計課などはギリシア人の課長の下に三人の婦人秘書 (イラン人 英国籍のフランス人 アメリカ人) がいるだけで 出張旅費や俸給についての全部の事務をテキパキとやっています。この秘書の中の若い米婦人は東京に勤務したことがあるとか 私達には日本語で「何かお手伝いできますか。」などと愛嬌をふりまきます。

このように世界中の人が集まって業務を遂行するので 国連職員として服すべき職務規定が詳細に決められています。各国はその国の状況に適應した各国独自の職務規定を持っているわけですが 国連としては世界中の人達にだいたい適應しうる規定を持つ必要があるためでしょう。この規定は U.N. Staff Rules (国連専門家の職務に関する諸規定) という小冊子として各自に配布され 職責 義務および権利の項目にはじまって 任命 退任 旅行および異動 給与 諸手当 社会保障 休暇 懲戒 提訴などの各項目にわたって記載されています。職員はこの規定を精読してそれによく通じていなければならないといわれるのですが さてこの規定は非常にむずかしく 私などは何回読んでよく理解できない部分があります。現実には英語を母国語とする人達もふくめて 諸外国からきている専門家でこの小冊子に精通すれば国連の弁護士になれるなどの冗談さえ聞かれます。実際問題としては事務は全部事務局で取り扱ってくれますから われわれがその規定と首つ引きで過ごすわけではなく ほとんど聞く機会もなく 極端にいえば聞くのは俸給表を見るとときくらいかも知れません。

ただ一つの小さな国連事務局についての観察ですが それだけを見ても世界中の国々の人達が集まって一つの事業を遂行するために互いに助けあって働くことの大きな意義を感じます。特に私が日本人として感じるのは日本からも もっともっと多くの人達がこのような機関に入って気らくに世界中に散って働けたらということです。若い婦人達でも転勤命令一つでアフリカからテヘランへ テヘランからデ



⑨ ラグタをつらねての調査旅行(パルチスタン地方)

一へと動いています。世界の距離が短くなったといわれ離れた国が互いに結ばれやすくなった今日 われわれがもっと考えなければならない問題の一つと思うのです

## 5 調査の実体と調査余談

さて次にわれわれが現在実施している調査について述べることにしましょう。

年度内の調査計画は われわれが討議の上で決めますが イラン側の要望 (たとえば銅鉱床賦存地帯の調査を優先的に取りあげたいなどの) を考慮することももちろんです。イランでは回教歴を使っていますから 3月下旬に正月がきて新年はだいたい4月から初まります。そのため われわれの新年度はイランの新年1月に始まるのです。したがってイラン歴では 現在(1965年5月)が1344年2月に当たります。

イランを全般的にみると このごろが調査に最適な春のシーズンですから調査は4月下旬ころから出発します。調査に必要な空中写真の現物は地図局で保管しているため 2・3カ月前から必要部分の複写を依頼して調査所で購入しますが 日本におけるように自由に販売しているわけではなく やっかいな手続きを経て入手するので

Aeronautical Map も入手はやっかいで 一部づつが調査所に保管されているだけです。これもコピーをかって使っています。それらが順調に入手できない場合がしばしば起こって困ったりしますがこれはどこも同じのお役所仕事のためでしょう。それらの入手が終ると倉庫に保管されている調査用品を準備して出発ですがすべての調査用品 つまりハンマー ブラントンコンパスから野営用品にいたるまでほとんど全部が国連によって輸入されたもののため 数量にも限りがあり 破損の修理も簡単には行かず われわれはいつもこの問題に悩まされるのでした。文房具はドイツ製品が町に出ており 高価ですがすぐれたものを自由に入手することができます。日本におけるのと違ってイランでは調査には常にテントを使い 携行寝台 毛



⑩ 部落近くの谷間にあそぶ羊の群 (アザルバイジャン地方)

布 折りたたみ式のテーブル 椅子などから炊事用品、食器に至るまで全部持参します。もちろん 部落で部屋を借りることも無くはありませんが 寝台 寝具などはどうしても必要なわけです。人員の構成は常にわれわれの一人が班長で イランの地質家 2・3 名が助手をつとめ そのほか コック 1 名と運転手です。車はジープ ジープステーション ワネット (小型のトラック) の編成ですが、ジープを除いた二台で行動することもあります。運転手はもちろん 車の数で決まるわけです。このような編成で調査地に入るのですが 一日の行程は道路がよい場合でも 600-700 km ですから遠距離の場合には途中のホテルに泊ります。大きな都会には小綺麗なホテルがあってゆっくり休養することができますし また国道沿いの町村には茶店で泊める場所も見つかります。イラン人は彼ら向きの宿に泊ったり 時には町はずれに早速テントを張ったりしています。われわれがこのような場合泊まる都会のホテルはだいたい 400RIs (朝食付 1 Rial = 約 5 円) ですが もちろん茶店などでは 100RIs 以下で泊まれます。いよいよ調査地に入り 部落の付近にベースキャンプを設営するのですが 鉱山などがあればその世話になったり またときには学校などにも泊まることがあります。一般地質調査(図幅など)の場合に いきなり部落に車を入れると車などの珍しい山間のことが多いので エンジンの音でここからともなく大勢の子供 大人が集まるのが常です。ただ女子は決して近よってこず チャードルにその顔をかくしながら遠くからチラチラ見えています。がいて部落の人達は親切で(珍しさも手伝って)車から荷物をおろしたり キャンプ設営するのを手伝ってくれます。食料は米 野菜 調味料などは町で買入れますが パンは部落でととのえることができます。パンといっても東京でみられる白い食パン(テヘランその他の都会ではこのようなパンが販売されています)ではなくて 小麦粉をこね平らにのばしてカマドの中の小石の上でや

いたごげ茶色のもので 大きさは一枚が 30×60cm 位あるものをちぎって食べるのです。

肉類は羊肉とにわとりで テヘラン以外で牛豚の肉を得ることはむずかしく牛肉はときに得られてもきわめてまずく かないのです。豚肉は回教によって食べることを禁じられていますから テヘラン市内の 1・2 軒の肉屋で買うことができるだけです。テヘランで牛肉は 1kg がだいたい 500円位 豚肉は約 1000 円位です。調査地で肉といえは羊肉なのですが 羊肉に慣れればその方がへたな牛肉よりもよほどよく また例の臭味も料理の仕方によってはほとんど感じられません。羊の「もつ」やときには「脳みそ」まで食卓にのぼります。地方によっても また各々の部落によっても差異はありましようが 羊一頭の値段は約 4000 円位でしょう。にわとりも部落で飼っていますから 卵と共にどこでも入手することができます。一羽の値段は 400 円内外 卵一個が 25 円位です。もちろん日本のように食料として特別に飼育したものでなく 飼料も良質でないためやせていて肉は少なくかないのですが コックは長時間煮て結構食べられるものを作ります。もともとイランの料理は 羊かにわとりの肉を主体に 油を多く使って焼くか 煮るかしたものが多く テヘランでも料理の種類はきわめて少ないようです。イラン人の家庭に招かれても 出る料理はほとんど同じで 日本におけるように色々な種類の料理が家庭によって作られるというとは まずありません。調査地で使うコックも日本でコックというのとはいささかちがいが 単にイランの数種の料理ができるというにすぎず ヨーロッパ風のものを作るものはまれでしょう。米について書くのを忘れましたが ここイランではカスピ海の沿岸で非常に良質の米がとれるのです。テヘランから約 5 時間で エルブルツ山脈を越えて北側のカスピ海側に降りると そこは砂漠の広がるテヘラン側とは全がちがって緑の森林に包まれ水田や茶畑が広がっており 日本と同じようなかやぶきの農家がみられ この地方でとれる米はわれわれにとっても日本米と変わらない味を持つといえるのです。形はやや細長く 日本という外米ですが炊き方も同じでよいのです。もつともイランの人達は油を加えて油だきするのが常のようですが、このよう

な米は町で買う(最上品 1kg が約 130 円) ことができます。部落で得られるものにバター チーズ ヨーグルトなどがあります。羊乳を材料にして作っているのですが これらは味もよく われわれの好物となり得るものです。また北部の部落では養蜂をしている所もあって蜂蜜の得られることもあります。さらにまた 全般的にいつてイランの果実は日本のそれよりも美味とも言える位です。種類も多く 日本で得られるものはほとんど全部あります。果汁が濃く 糖分も日本の同種類のものより多いのではないのでしょうか。ただ リンゴだけは日本の方が形も大きく味もよいようです。オレンジ ブドウ ザクロ メロン 西瓜などは確かに日本のものより良質で安く しかもそれらは日本におけるほど 手をかけずに栽培されているのに違いありません。またイランは木の実の種類の多いことでも有名です。非常に多種の木の実が町に出ていて その中のあるものは東京のデパートにもでていました。

話がだいぶ横道にそれてしまいましたがとにかく部落にベースキャンプを作ってから毎日の調査が始まり それは われわれが日本で普段行っている調査と同じ型で行なわれるのですが 地形図の代わりに空中写真のみを持って歩くことがちよつとちがいます。そして北部の地域(前記のカスピ海沿岸地域など)を除いては全地域がはげ山で 谷間にオアシス的に樹木が見られる以外は全山露出と砂漠であることが大きな差異と言えましよう。全山露出といっても原岩が必ずしも露出しているとは限らず 崖壁や表土 岩屑などで被覆され 原岩は露出していない部分も多いのです。また砂漠とはいっても それはいわゆるサハラ砂漠というような砂原 砂砂漠ではなく 岩石の散らばった荒野 岩石砂漠が多いのです。もちろん 中南部には砂砂漠の地帯も見られますが、このような地域ですから 日本に比べれば調査は非常にやりやすく 空中写真をみても地質の状態はよくあらわれていることが多いのです。調査地の平均高度も日本よりずっと高く 日中の温度は高く(北西部の地域でも夏期には 55°C を経験しました)木陰が全くありませんから 体力の消耗は日本よりかなり多く 一日の行程も自然に短かくなってがちですが 露出のよいことに助けられて調査は比較的容易です。イランの地質調査は現在の段階では 小地域の精査よりも広範囲の概査に主眼がおかれていますから ベースキャンプから山間地帯への移動の必要性も強いのです。そのような場合には南部では主として ラクダ 中部・北部では ロバ ミュール(ロバと馬のあい



◎ 谷間の部落(アザルバイジャン地方)

の子)を使ってキャンプを移動して行くのです。水のありそうな山間の部落から部落へのコースをとって 全部の荷物をラクダなどの背にたくし 二週間内外を一行程として調査を実施します。その間ベースキャンプに運転手と車を残すことになりませんが テヘランから 2・3 日行程の距離ならば経費その他の点を考えて いったんテヘランにもどし ふたたび所要の期日に呼ぶこともあります。一行程の調査行でも日数人数から計算した食糧 野営道具など一切携行しなければなりませんから ラクダにしても ミュールにしても10頭内外の数を揃えなければなりません。山間の小部落ではそれがなかなか困難で 時には相当離れた部落から 2・3 日を要して呼ばなければならぬ時すらあって 計量した食糧の不足 調査予定のおくれなどに困却することもしばしばでした。このようにして実施する調査行を 4・5 回くりかえして一つのフィールドを終るのですが その間に調査する面積は もちろん個々の調査によって差異はありますが 平均して日本の20万分の1 図幅位になりましょう。現在のわれわれの計画では図幅は25万分の1 (経度1°301'×緯度1°001')で 地域地質図は10万分の1 で発表することにしています。

日本の面積の約4倍半もある広大なイラン全土にわたっての調査が ようやくその端緒についた所ですから 全国がある程度の概査によってカバーされるのにさえ 今後何十年かを必要とするでしょう。

私が今まで調査した地域は南東部のパキスタンとの国境に近い パルチスタン地方の一部と 北西部のトルコとの国境に近いアザルバイジャン地方の一部にすぎませんが これからそれらの調査行の余談として 印象の深かった事がらについて少し書くことにします。

パルチスタン地方はイランの南東部にあって 東はパキスタンに接しています。テヘランから イスハハン ヤズド ケルマンなどの都市を経てパルチスタン州の中心都市であるザヘダンに着くには車で約3日を要します。ザヘダンからさらに南下して調査地域のバズマン山(Mt. Bazman)のふもとまで一日行程です。走行距離はテヘランから約2000km でしょう。(青森—東京—下関—鹿児島は約2200km)バズマン山の南側には東西約400km 南北約100kmにわたって ジャズ・ムリアン(Djaz Murian)と呼ばれている乾湖の砂漠地帯があって その東端にバンプール イランシャアの二つの町があります。私はバズマン山と この砂漠地帯の中間部に入ったわけで その地域からこれらの町までは約100kmの距離があります。パルチスタ

ン地方はイランの中で一番開発がおくれている地方といわれ 人種的にも特長があり 言語もバルチ語が使われ ペルシア語はほとんど通じないのです。調査地域内は全部が砂漠とはげ山ですが 各部落付近には水が流れ なつめやしの林などが見られます。気温は年間通じて非常に高く 私の行った12月・1月でも日中気温は35°C以上でした。砂漠の中はどこでも同じですが ここでも日中の気温が高くて日没と共に気温は急激にさがり テントの中でアラジンヒーターを使うこともあった位でした。空気は乾燥し切っており すべてのがカラカラに乾いています。部落の人に雨はいつ降ったかと聞いてみると3年前とか 5年前とか まちまちの答ですが とにかくほとんど降雨がないということにはかならないのです。砂漠地帯ではこの地方にかぎらず 羊の皮袋に水を入れて炎天下に下げておき 炊事や飲料に使っています。皮の表面にしみだした水分が蒸発して熱をうばうため なかの水は非常に冷たくなるのです。また愉快なのは調査の時の水筒代わりに織目の細かいズツクの袋を使用することです。日本だったらポタポタと水がたれおちるところでしょうが イランでは乾燥していて蒸発が激しいためそのようなことはなく 羊の皮袋と同じに使えるのです。ちなみにテヘランなどでも平均湿度は50%以下で乾湿度計に付属している 日本の湿度計算表はイランでは役に立ちません。\*この前 一つ雨が降ったのか? の質問に対して 3年前とか5年前とかの答だと書きました。

これについて疑問を持たれたかと思いますが このあたりの人々は村長(酋長という方が当っているかも知れません)でも自分の年や 自分の子供の年令を正確には知らず また時計の見方も知らないような状態で 次の部落までの距離をきいても20km といったり 200 km といったりするぐあいです。

また所要時間 車で2時間といわれて車を走らせると7時間も8時間もかかるというような状態なのです。ですから 彼らにとっては3年前も 5年前も同じに考えているらしいのです。部落のまわりには 知らしいものを作り 小麦を植えたり 時には玉ねぎも植えてあります。ここで \*知らしいもの、

と書いたのは 日本の畑を思わせるといけないと考えたためです。\*らしきものは石ころだらけの荒地にただ種をまいたもので作物も日本のそれとは全くちがって やせほそった麦であり 玉ねぎであるわけです。人々は日の出と共に羊の群を山に追い 日没と共に帰るというような生活を子供の時から生涯を通じてくりかえして行くのです。私はこの人達がどのようにして生活を維持して行くのか どうしても理解できませんでした。政府の指令なども全く行きとどかず 昔からの酋長が世襲で 地方地方を治めている様子でした。

住居はなつめやしの葉やせんいであんだアンペラを使ったキャパールという小屋で 形は長杯を伏せたようなものです。前が入口で 日の出と共においをまくり上げ 日没と共におろすというわけです。前述のように雨が降りませんからこれで済むのです。内部はさすが ペルシアだけあって部落で作ったカーベットをしき 綿の入ったふとんや毛布を寝具にしています。酋長のキャパールに一夜を明かしたことがあります。家財道具としてはわずかの箱と引き出しがある位でした。このようなキャパールが数個あれば部落で 多い場合には大小20個位が全く樹木のない砂漠の中にかたままって部落を作っていることもあります。このような場合の飲用水は例のカナットによって得られているのです。この辺には砂漠も相当広く分布していますが 大部分は岩石の散らばった岩石砂漠で きれいな三稜石がたくさん散在し サボテンやとげの多い枝ばかりの雑草 かん木(緑色の葉は全く見られません)が点在しています。このように 水分が全くないといってもよいほどの砂漠の中にも長経30cm位の甲を持ったカメや大きなトカゲ類が生きており また狐や山犬のたぐいも生棲しています。部落を離れた山ろくに キャンプした一夜 狐か山犬の群に囲まれて夜中に驚いたこともありました。テントのまわりを遠く近く グルグルまわるたくさんの黒い影と フラッシュライトの光



⑩ 緑樹にかこまれた村落 まわりは見渡すかぎりはげ山と砂漠(アザルバイジャン地方)

に青白くキラリと光る二つの眼はたとえようもなく不気味なものです。かつて見た映画『砂漠は生きている』にあらわれたような生存競争がいたる所で繰り返されていますが、翼長3m以上もあると思われる数羽の大鷲が頭一のラクダを襲ったせい、惨な闘争は対象が大きかっただけに印象的でした。この大鷲についてはこんなこともありました。見渡すかぎりの砂漠の中に入りますと、遠くに周囲の山が見えるはずの場合でも、砂じんによって茶色にかすみ全く何も見えず、進路はただ磁石にたよるほかない場合がしばしば起こります。岩石砂漠といっても浸食によって生じた深いゴーチ(溪谷)があり、また砂丘も波打ち決して平らではなく、40~50mの起伏はいたる所にあるのです。車は散らばっている岩石を避けつつ蛇行して行きますから、磁石による方向決定もあいまいになって進路を保つことはむずかしく、方向決定を誤ることもしばしば起こります。このような状態に困っていたある時、前方遠く人らしい姿が砂丘の斜面に見えたのです。砂漠のまん中に立つ人の姿に不審はいだいたいの、思わぬ所に部落のあることも経験していましたが、薬をもつかむ心持ちでそれに向ってまっしぐらに車を走らせることを命じたのです。砂塵をまいて吹く風の中を走っていくうちに、その黒い姿は突然大きな翼をひろげてフワッと空中に舞い上がったのです。近くに大鷲を見たのは初めてで、想像だにもしていなかったできごとにも全く息をつめる思いでした。波打った砂丘や溪谷のために、遠望は案外きかないことも砂漠の中ではよく経験することです。

調査地域のキャンプからイランシャアの町へ(直距離にして約100Km) 食料やガソリンなどを買い入れるために助手と二人の運転手をだしたことがあります。往復に三日を要し、途中は全くの砂漠で道などはないのです。助手の中でも一番信頼のおける人を選んだのはもちろんです。途中不慮の事故を思っ、て飲料水、食料、毛布、ガソリンなどを携行させたのですが、三日目の夕方になっても帰ってきません。心配しつつ日没を迎え、幸い用意してあった数mの長さの棒の先端に明るい石油ランプを輝かせ、それを立てて待ったのですが、遂にその夜は帰らず、残ったわれわれはほとんどねむれずに朝を迎えました。砂漠の中で車の故障がおきたら、全く動きがとれません。往路の事故とすればもう四日目、水もそんなには持たせていない! いつか砂漠の中で見た人間の白骨が脳裡をかすめます。残る車で迎えに出るにしても、どの方向に砂漠を走ったかさえわからない

状態です。平常は車輪の跡を追っていくのですが、一旦ほんの少しの風が吹けば、またたく間にその車輪の跡は消えてしまうからです。砂漠の苛烈な様子を味わってきてはいても、経験の浅い私は不安の心持ちをひたかくしに、残った助手を元気づけながら待つよりほかに手の下しようがありませんでした。ようやく数時間後の正午近く、キャンプに飛びこんできた助手の一人から、エンジンの音が聞こえると聞いた時の私の心持ちは、ご想像願えるでしょう。彼らはやはり自分達の車輪の跡を見失い、ついに一夜を砂漠に過ごし、夜明けを待ってかろうじて帰る方向を見出したのです。高くかかげたつもりで明るランプは、全く認められなかったとのことでした。満天に星は輝いてはいても、ほんとうに真暗な砂漠の夜ですから、いくら遠方からでも見えると思っただけですが、砂丘の起伏がさえぎってしまっていたのです。

ほんの少しの風でも車輪の跡は消えてしまおうと書きましたが、これが砂漠の砂嵐ともなればどんなにすごいかは経験したものでなければとうい想像もつかないものです。天日を暗くするような茶色の砂塵が目を開けていられないほどに砂漠をおおうと、その中に10数本の砂の柱がたつまきによって立ち、その柱は風の方向に流れて、すべてのものを吹きあげながら進むのです。砂嵐の中に車がおかれたら風上側には、みるみるうちに吹きつけられた砂が、つもって30分もすれば車体の半分位は完全に砂にかくれてしまいます。このようになった車を掘り出す作業もまた並たいいではありません。したがってスコップは砂漠の旅の必需品です。強力な前輪駆動の車も砂漠の砂にはきわめて弱いのです。ようやく車輪をあらわした所でエンジンをかけても車輪はただカラマワリをするだけです。あがけばあがくほど砂の中にめりこんで始末がつかなくなるのです。では車輪の下に何か草や木の枝をあててと思っても、ここは砂漠のまん中、一本の草木もないというわけです。あるときなどは、熱風の中の作業を完全にきらめて、ただ時のたつのを待ったこともありました。

またある時はなつめやしの林の中に張ったテントがたつまきによって一瞬のうちに巻き上げられたこともあり、吹きはじめた強風に、私はテントのロープをしめさせて倒れるのを防いでいる間も、あらばこそやしの木々をなぎたおすかのようにおそつたひとすじのたつまきはアツという間に一つのテントを引きちぎって巻きあげたのです。われわれはただもうあきれてやしの太い幹にかじりついていたのです。

しかし、これだとして自然の力の大きさと人間の力の弱さを如実に見せられた一つの小さな、小さな現象に過ぎないわけですが、なつめやしの林の中のテントについて思い出すもう一つのできごとがあります。前に書いたように、バルチスタンの山間部落では昔ながらの世襲の酋長の勢力がきわめて強く、現在でも捻奪、闘争がときにはくりかえされると聞くのですが、部落に入る時は金銭の贈りものが一番必要で、また有効と聞かされて、その時々によって便宜を提供されていたのです。部落から部落へ移動するときは酋長を道案内に連れて、新しい部落の長に連絡をとらせ、われわれを引き渡させ、そのときに適当に話をつけさせることにしていたわけです。

あるとき、このような条件を済ませて酋長の許可を受け、なつめやしの林の中にキャンプを張って夜を迎えたのですが、夜半不気味な音に目ざめた私はテントのまわりを流れる水音におどろいて飛びおきました。やしの林への給水のために、山の水源からみぞが続き、必要に応じてせきを除いて林のやしに給水しているのはどこでも同じですが、なんの恨みがあつてか、なにに不足を感じたかはわかりませんし、だれがどこのせきを切ったかもわかりませんが、それでもキャンプ地に水を流されたのです。真の暗闇の中に音もなく、またどこからとなく、テントを浸して流れる水に私はなんともいえない不気味さと恐怖を覚えて、一夜をまんじりともしないで過したのです。部落の住民は鉄砲をたずさえてわれわれのせまいテントの中に坐りこみ、2時間も3時間も立ち去らず、時々鋭い目つきで凝視したりしていますが、このような場合に私はかつて一度も不気味さや恐怖を覚えたことはなく、むしろ助手たちの感情を静め、ぜったいだいじょうぶ、心配ないと、幾度も話してきたのですが、この水攻めにはほんとうに不気味さと恐ろしさを味わったことでした。

バルチスタンの旅では全く神経の休まるひまもなく、不測のできごとの連続でしたが、これは前記のように、イランの中でも自然環境のいちばん悪い地方であることや、未開発の地域であることが原因していたのでしょうか。外国人の地質家で(イランの地質家はいうまでもなく)バズマン山の近くに入ったのは、英国のJ.V. Harrison ほか1・2名だけとかいう話です。人間の住める所とは思えず、また通れるところとも思えない、このジャズ・ムリアンの砂漠ですが、数千年の昔から現在まで、隊商はラクダの綱を引いてこの砂漠を横切って往復しているのです。絹の道(Silk Road)の本街道はもつと北部を通ってい



たのでしょうか。ハネベ、バビロンやペリセポリスの文化はこの砂漠を横切る隊商によって、東へ東へと運ばれたことがあったのでしょうか。

### 茜さす砂丘に長く影ひきて 何処へ行くかキャラバンの群

地質の話はいずれの機会にかお伝えすることがあると思いますが、この調査中に見た広域変成岩類と花崗閃緑岩との接触部には、日本でしたら当然天然記念物の指定を受けるような数種類のみごとな接触鉱物の大型結晶が見られました。いつの時代かに掘られた銅鉱床の採掘跡では直径10cm以上の水晶の破片を拾ったりしました。

このバルチスタン地方と違って、次のアザルバイジャン地方はいろいろの点で恵まれています。テヘランからカスピ海岸へ出る主要道路の一本はテヘランの西方150kmのカズビンの町から北方に向ってエルブルツ山脈の谷間を越えています。他の二本のエルブルツ越えの道路が開発されるずっと以前から、欧州やソ連邦からの道はカスピ海岸のバンダラ、パーラビ付近からラシトの町を経てこの道を南下してテヘランに通じていたようです。広い意味でのアザルバイジャン地方は、この道路から西方トルコとの国境までの地域をさすのですが、この地方はイランでいちばん平均温度の低い地方の一つです。地形によるのでしょうか。このへんではエルブルツ山脈の北側よりも南側の方が温度が低く、冬は零下20°—30°Cになる所もあり、真夏でも山間部の夜はアラジンヒーターが必要な位です。カズビンの町から北西へ約180kmの所にザンジャンという町がありますが、その町を中央にしてイランで初めての図幅作成を試みたのです。地域が広いのと時日の制限からスイス人のDr. Stöcklinと二人で調査を進め、私は北東の半分を受け持ち、第三紀の火砕岩地帯の調査を長く続けました。この地域には以前から銅鉱、鉛・亜鉛鉱がみつけれ、中には小規模ながら現在稼行している鉱山もあり、さらに有望なものもあるらしいとのことで始めたのですが、鉱床の発見の意味では結果はあまり思わしくありませんでした。前記のようにこの地方は涼しく、また降雨量も積雪量も多いので、谷間にはポプラや白樺が林をつくっていて美しい緑野も見られます。

しかし山はやはりはげ山で、砂砂漠こそなければ、原野はほとんど広大な岩石砂漠です。トルコに近いためでしょう。人種もトルコ系やアルメニア系が多く、部落の

人達はトルコ語を使っており、ペルシャ語の通じる人は限られているようです。部落の人達はこのへんでも一日中山から山へ羊を追って生活し、平野では小麦を広く栽培しています。山で数百頭の羊を追う人達に会ったりすると、喜んで羊乳を飲ませてくれることがあります。彼らは火をたいてそのへんの手頃の石を焼き、それをしばらくたての羊乳の中にほうりこんで乳を暖めて飲むのです。羊乳をいちばんうまく飲む方法として古くから遊牧性の彼らの間に伝えられた方法だという話です。羊乳を飲みながら彼らの中に坐って紺青の空に浮かぶ白雲をみていると、遠くへきているなあ、などとふっと思います。助手の通訳によって聞いてみますと、彼らは日本という国ももちろん知らない、日本人に会ったのも初めてである、そして私の持つカメラや磁石や高度計をふしぎに思っていることなどが話題になっているようでした。テヘランのオフィスでも、また野外でも、いつとはなしに自分が日本人であるという思いから遠ざかって生活していることが多いのですが、こんな山の中で、日本人などの言葉を聞きますと、私も改めて日本からきて、イランもアザルバイジャンの山の中にいるただ一人の日本人であることなどを思い出すのです。

### 高原の羊の群はゆるやかに 流れる雲の下にいこえり

アザルバイジャンの谷間の5・6月頃は、ほんとうに美しい花畑の観をていします。名も知れない色とりどりの草花がいちめんに咲き乱れ、清冷な水が豊かに流れています。そのほとりには矢車草、みやまきんぼうげなどもまじっていました。私はそんな花畑をえらんでキャンプを張らせることにしていたのです。

### 百千草咲きみだれたる高原を 短歌想いつわれ一人ゆく

部落の近くには深紅のけしの花がいちめんに咲いている原もあって、そのかたわらにはいつからか住む人のなくなった家の土壁がくずれおちていました。

### 土壁の残る廃虚のかたえには 深紅のけしの一花のあり

またポプラや白樺が緑の葉を強い日の光にキラキラ輝かせながらそよいでいます。時期によっては桜の花すらも見られるのです。このあたりでは平原に下ればいちめんの麦畑で、六月に入れば豊かに実った穂波が黄金の波を打っています。

### 見晴るかすイラン高原いろづきし 麦の穂波に風わたるのみゆ

アザルバイジャン地方のあちこちには古代のペルシャ文化の遺跡が残っており、各国の調査隊も幾度か入っています。ケゼル・オウザン川のほとり、絶壁の上に有名なアサシンスの城塞の一廃虚がそびえています。この城塞については英国のP. Willeyを中心とする調査隊によって作られた詳細な報告書も出版されています。この城塞の建設とそれを中心に行なわれた幾度かの戦いについては、ペルシャのジャン・ヌ・ダークともいわれるような一人の美しい少女の伝説が、いくつか伝えられています。美しい満天の星空の下のテントの中で、私はこの城塞のものがたりを読みながら幾夜かを過したことでした。輝く星の間をわけて進むように、そして規則正しく二時間ごとにコースを巡るソビエトの人衛星の飛ぶのを初めて見出したのもこの城塞の下だったのです。

### 月落ちて北斗の針の指す彼方 古城は黒く夢のごと立つ

平均してアザルバイジャン地方はバルチスタン地方に比べると開発も進み、農産物も豊富でしたから、キャンプの生活もあまり苦労しないで送ることができました。お話しすれば限りなくらい、変わった珍しい時には恐ろしい経験はしましたけれども、この地方の火砕岩は大部分が始新世のものでニューメライトを産出します。私は日本では始新世の地層を見る機会がなかったのですが、インドネシアで同時代の地層を含む区幅を作成して以来、妙に始新統に縁ができてしまいました。安山岩質の熔岩や紫色がかかった赫色の凝灰角礫岩の間に、やや緑色がかってはいますがほとんどまっ白な凝灰岩の層が見渡す限り10数キロにわたって露出していましたが、また始新統と中新統の間の不整合も数10キロにわたって露出しているという状態でした。これらはイラン国内のほんのわずかな地域の一つの例にすぎませんけれども、全体としてみても、イランは野外地質家にとっては全く興味のつきない研究対象といえましょう。

### 山波に白き地層のひとすじに 果なくつづくイラン高原

### 山波は眼下にありて遠き世の 地球のさがをわれに伝うる

〔筆者は地質部 現在イラン国へ出張中〕